茶話目録

全

ヲ9
663

門多
號 653
卷

宮内省圖書寮

茶歌目録

初庵峠入

待合ハ　青楓ひなハ　亭をいろ
来しかや　一樹しぐ　ずれ金釈
勝ノ日ハ入　田ハ　庵たなや
庵中茶ハ　見ぬ人ぞ　蹲上り
明いて　ぬ水揚へや　園地の門
仙洗清ル　ぬれよりも　中潜あけ
外ハいて　いさまるへ　業門

を作やうて　門ふいり　費長不立ふ
家あるは　情よりも　帳巾しり
のこひと戸をい　口すかのの　入そうほと
引れたし　にたり上りの　戸城明て
それお根ふ　よりせ重て　戸をひらせて
門ふ入れ　和歌人い　押ほき
ときいろに　興惟して　閉章を
箇地ようと　庭費入城　かんかへて
笑賞あい　桐宮中　乗ふ時但

中くり　ふ乳脈ふ　入ててて
行の戸城メ　樹令し　板それよりも
箇地のてい　樹木ゐ花石　灯籠や
賞一掃除　水ふれてい　自水ゐ多ふ
乗城つ事て　上あよりも　脈くふ
市水ほうひて　くるる樹ケ　刀照せし
か事おきて　端上りれ　姫ういしふ
ほくてい長て　戸城明ると　園れ門城
見めくし　さて門ふ入　居かへりて

それ初めて服いるか よせう年重て
家まへ人へ れ 事ふ重り か者とれや
又前こうり 只おいりて 道ら事の
門ふ西き 答より 一読て
「さて二れ者ハ 上 客れ 道ら事へ
行ゆ只こ 前の方法ふ 門ふ入
家一読し 上 者れ 庭ふ法く
桐まへれ 勝をつて 出ふ法く
「数人りふこ 四くそ出る 和メ人の

役ことして 玄関の戸ゆメ 戸のさんふ
四年合ひ主ハ 無てをく 庭前の西い
上 者れ 指ふ置ふ 庭ふ法く
茶ふりふ平きいろ 大事なし
「そ者きいろ 指ふろし 出て
「一首ハある人若文時遠ろく 茶湯ふ茶ふ
ろくりふる丁ゆ上ハ れ人のそ へ れハ 陽ふ多ッ
りておまき一人もまつ ふれを 遠屋しけ 客を
出ゆて 紙そよくふ ふくのひ ふれハ茶湯

ふ業門うくたく遠うさ新やうふし好落成れ
糸板と第ふ遠州伝考るいやく書遠クい
和密沢ふ章をと伝意ふる（きふ単しる事ふ
なしとそ〳〵口ふし牧日ふしと読ふ中ふ当いハ
今日のて〳〵単くてハ和密城伝意ふ出なれ夫ハ
一ふのる単ふハ訪うさ城よりと中ふ城ふ人の
和漢ふ学まふ言初ふ書伝しと牧
外国地ふ自ふ此草履もち遠ふ
なをふ大変とのそれより地ふく

伝人城伝合まふ気ふ法れて
客数と志ふへたけしきふ人
侍合ふしてを者ふ訪地そり
数ふて者乃かふハしる
而物〳〵て訪地ふ遠けしふ人数う
あハ塾てハをけそふふ者ふ
侍合ふ視老帝ハるさふ人
ふハ火ふ城 とく
夜合ふて者人をやく来ふ

出ては入
中潛むかいに出てゝ紹はを
付ゝとて京へいりは
客人にまゝ如やうにそれを見
提ゝ京へ
兼會にも又鄭重多きうとき
ゆいぬるなりは入て
呼入ゝ海地にて
京をゝ遣てかんしわむ

初入ゝ客座なゝ
中ゝ
ゝ水ゝ
なをし
いつてゝ水つかけしやくの柄
なゝ洗ゝ
口ゝ
柄ゝ
下結をさゝ

刀にまさしかく後かりに柄を外へかくなるときさて意てあるもとかく初抜をくかしたかく疫人して京を出さまれその間を仏法にしたがしくはたくいよ京を出に仏るまれやうに国地はをい隙かけもあかんしかむへ夜源くに中う詠をかりなかんまを中しちして地にをいかむ

家かりにまれを時にかをおまへか方なかしてをを外をるる初入かもも又中しちもかをさをんて後大用かをくくをれ後初入かをを先かまなるたかをを中しちして八たを答をを初いりかをを元をかを入て出れかを出るし京を志ふまをうか塔よ答も始事塵ありしてし初入かい

[illegible]が海にまり[illegible]利
せん庭しき大同まき[illegible]
先ハ床まへ阿弟て庭ふ[illegible]
床まへ[illegible]て客へ庭ふつのも
[illegible]上庭へ亭を賞せよ

炭点沢米

客人を法のてふ庭へて
床棚前の かまりみて席定へい

亭を出
炭汁形者
出しとき
勝手北方の
[illegible]
羽箒をて
出しをき
つまの環を
左より

が時金釈
論へと
ゐかへ
[illegible]ふ
伊呂利の更
出へへと
香合へりて
左ふ[illegible]
先湯を

勝手ふ入
表中通ふ
右渕を入て
先炭点て
居出りて
強と[illegible]ふ
をあ是
答礼蓋メ
右[illegible]かけ

懐よりも　武帯とり　切目を向て
右ふかく　水桶ふ　直し清
冷ふ向て　こゝ元ちを　けさふ清
冷をあけ　武紙のよふ　歩しをき
歩ふ風呂桶　強きにへ　三寸ばかり
間をしき　引寄て　太ようも
先湯をて　風呂口きた　強く冷る
前かしふ　掛に掛へ　熱に成
ぬふかして　ゆきを拭き　羽箒ゑて

炉灰ちよう　古版し拂ひ　羽箒ち
をゝ出れ前ふ　歩をきを　火着をな
火鉢歩し　白焼を消て　火着をい
灰をたゝひて　羽たきふ　をゝ出て歩
あふいまゝ　柄を逆さふ　風呂つきの
強ふ立かけ　かりふをき　板炭斗を
根ゝまゝ　向へなりて　よせをきて
ほゝ清くれて　伊呂前縁　前角ふよせ
灰をまき　板ゝ清へ　ぬへとり

道具の
炭斗に
白炭備炭
を入れて
備炭白炭
香合に
も同じく
火着炭は
蓋を取て

右より小
炭斗に
入れて
炭斗に
入れて
蓋を取て
香合と
炭斗小入
備炭へ

出しを
炭斗の内ハ
いろり様
皆掃除して
雪掃きて
谷のみそれ
拭たるの
上ハ谷帳
にてとも

雪のなくハ
入れて
古炭の
羽箒
風炉畳の
内ハ
腰掛
行燈
右を

香合ニ炭
掃除して
風まそ
ここの和ハ
陰る明
掃除ちと
行ハれ
左のをそ
下ハ

釜に右の
釜にかけて
手ぬぐいを
右にふく
よく拭ふ
巾にして
上に押へて
のさひ
上に重ね

前ふをき
ぬぐいを
片にはに
右を持て
釜に蓋
右に
上に
又
片に
勝手に

弁当を
下に置
にふをかけて
釜に水
右に
右にして
又
の

右より
湯を
炭に
東府の人に
通して
藻を引て
ふを
又
炭に

釜に湯を
置
上に
右に
炭に入
炉に向
右に
羽
入て

釜に
炭
湯
炭
風呂
炭を
あ
炭に
入

釜に
炭
湯
右より
風呂
炭を
あ
炭に
入

羽箒掃出　炉迄りや　炭斗の跡
居て後残　ちりをはらひ　勝手に入
帛おさめ　炉縁をも　向残巾ひ
左り右　おのつから巾ひ　定まりに
帛改め　答れあり　右の手重て
勝手に入　跡れふ用を　立て社なけ
炭とりに火なくし香合据なくしき
見えてよろしく重て出なる

炉の炭は巴角に重残まくにたすり
掬残の外は作意志らに
十文字ひらき志らしにたあらへ
大体たさてはしたかひて世ん
口り炭はまり見残上に輪炭なをし
小口残上に見してなくし之
白炭は本残咎めし悪しき炭を
向にたして風流に重帯
寒天は別なくし冰は炉の底へ

ぬうくい者共ハ大炭ヲ
貯菜ハ竈ぬりかうたをこゝ
煙物者合用ゆるりに利
貯ハかゝ様ハ作者ニ而ヒせ番
ゑハ者者和用ゆ利に
薪ハ灰ハ重ゆ絡るゆ利
者ゑ又かゝハ炭のとゆ
三ヶ一微塵ゆ交し而ゆ灰
ゆしゑ見し而ほうろ小墨

薪ハ炭ゆうよ新ゆ絡合の
あ者者和ハ作り合せを者
灰者ゆ小せて拵ゆ者ふゆ
あをむけて入ゆうに新
古用ハ者ゆ又合入ゆ見て作
炭者庇しらをまをゆ
古田をハ炭ゆ者ゆ二ヶあし
炭ゆ者ハ者ゆ及せてをは
炭者をハ一者ゆ小ゆ茶ろ

掛まきあまるハ足のかりけ
初座ハ香炉ニ炭ハ時ハ炭ハ
香しきあい炭
答ル有ル炭ハ
流ル炭ハ人し炮中を
上ケ
出ル
右ハ
さて香合ハ

炉ハ外を掛ひ入ハ
廣ハほふまるとき
香合ハ足めなしハ人
亭ハ
炭ハ
炭ハ料理
答ル

食席料理

炭ハ

もりかへ、　脇　一郎
大根菓子　膳ものは　家内入
宮人小　膳ものゝ　打てきて
猪を清子の　いきふをき　ものゝ皆て
業門し　脇せんと　支仕は明
着ゐ戦して　打出て　引初戦
出て　強仕は立　上表者
喰ものを　かんかへて　初仮を
のせ　打て　金沢　金沢
上表者ふ　やしおし

汁をこの人　汁もる門ふ
又いて　二人の宮人の　汁をかく
初め汁を　打る　幾人めそ
かへ　汁　金沢や
此辛者を　こり入て　清子門立
ずし　ものを　あせて辛を　きの清ふ
清子ゐを　打出て　初秋ハ辛を
砂ごとく　清人　辞退せし
てしぼして　引入ハ　又沢と

元時に
又汁を更
合に汁
てをとる
者人の
志の心あり
志こいなし
湯を湯に湯次
重ねて等
上者に

辛を拵
者前拵
無るを
仰おてし
き者人に
合席い
酒をさきに
酒を湯次や
氷次や
さう度に
きをして

扶拶し
てをしれへ
二献元
肴をし
酒を湯
酒こと人に
つき拵れ
さう度に
きをして

酒仕に入
をさきに
湯を勝に
めくに
を肴い
おいてきて
辛を
を水入更
に入れぬ

酒子をして
拵をさへ
入り入る
猪菓子を
めんきに
者に
国地へおて
元しやく重
相府者に

陽をめり
酒仕
辛を自分さ
に入る
猪を拵に
板更をし
水打々せ
湯に拵て
メの人

菓子を重ねる　勝手は、　迎え取り
より給仕して　亭主自ら　かつまる様
吸て中立　もるもの　とて
炭おきて料理をはきはきふたり
　　ずきゝ成るゝはもてをひのへよ
勝手ゆて用第のきまきへなるも
脇出るはいと府並作ゝ詠へ
亭主より六ゆゝいたゝかふゝよ
姉の料理いと尾家なりけり

配膳れあ手れらしをい亭主せよ
汁はれ手いゝ又ゆまゝ
亭主猪はれて出るいにまりゆて
中ゝとりていゝき様出る
よれれゆ其志なゝふいる近
菓子やうりはまゝゆめ様よ
引さいもゝかゝり様も重ねふ
まゝれ数ゝ入ゝ様出せ
引さゝゝさゝ様元とりまゝ

あまるやうふかせて有
汁にうち出羽ふかへて人数に
あまるぬやうふかせいてまるり
其色のたちれ所ふかいてまたよ
きたれい辛をもちて生へ
酒湯ふかこのたまく拵くてもいて
初献も辛をもちてよ
上戸ハ汁をたやく拵たく塩
梅はれ人ふまるせぬ拵ようき

拵ようい皆食はくし拵ぬをは
もし物足してあれ物
脇出し酒ようあいしてふ
辛を所しまふ生さるそうき
酒いて後ハ所しまふ走うて居て
さけをもまめ挟扨もせよ
猪のう人拵なちして猪をみて
きれうまれし辛をうなり
肴蓋ふ汁れるる生そて酒へて

それあつかいい湯ばかりにて
茶を呑みこなしておせる脇の上
まつ大こうこいふ所の人ぬぎよりき
俗みなこいふ一座ハ脇ハ一せんにて
組入通ハ人もあり口利
幸を招きハ人ハ茶屋に部屋
案内おち探ハ拭へ絞の上
まこと又着ハ姉きこうこうこう
絞ハ上ハ茶菓子ハ湯へ下ハ
湯をのこしまいハ除ハ除せ
脇ハ上やうこうハ行ておしなさ
菓子さしこうこうこうこうこ立
茶こいハ絞こうこうこうこうこハ門ハ
俗ハ表なこうこうこう暑熱こうこう
菓子ハ茶ハ夏ハ年ハの法なく
まれいふかこうこうこうこう客人
是こうこう脇ハ小のまハ小座ハ
ぬり形表を先ハ開ける

数寄屋へ小板を敷き其上に米ぬかを
置き其上に小入て是を敷
木目のそこへ白着色に
板をしを用ゐる
板をしは長さ九寸巾一ひやくふ
巾角六角本をしもをり
揚板ふい板をしとも板をよれ
長さ六寸二三分程
料理とい先あんをいふなり
せ

きをもりのくふ蕨粉半一
わりくて蕨をふ見へる風流
古風なる家のゆの料理といふ
味噌酒部人球茎よをしよりも
阪ハ赤球いとはまりなり
餡ゆる奥方さに
蕨をなりしもあるくまよ
奥方は胃ゆをれぬおるい
胃ゆ料理をハせよ

東舎又ふ対の方より数寄ふ入
料理いせ海ものしてしやう
数寄料理なれはまつ酒肴
口取ことさい宗易さい
宗易の数寄屋の料理こゝよりい
お酒出いまつまつ
草菴ふうはし初し会席い
をいまつ汁ふ又いてしやを
舎席い宗易より出まつ

熱て一汁二菜しまつ
出人まつ其れ酒ふまつこい
下座人年出ちり汁ハせよ
文仕ふい侍男さまつ
このむ乞飛ふい小侍ついい女

中立呼入

客人の　中立まつ　亭主ふい
挨拶ありて　掃除をし　床ふ花生

柳ぎい　作兵ゑふ但　かまりて
時の意異を　かんうへて　延時漳う
行みても　頭子さうえ　法めて
業門まれい　宮くい　名帳ふ
東法ろ　口　根猶　かけ垂て
初入のて　諸上り　戸押ゆて
門ふ入　法のて　麻柳城
一説しろ　府ふ所
中ちい業菓子仕地国地ろも

あるしかくいやうてかて
中ちち後亭白府ち城漳さ
をきあきやうふちきて地垂
中ちれ時ふもノれ浸て
麿あまいたり戸漳ろも
中ちふ落れ戸をはメれ人
ひつて立て垂ろかりる
月時てさしかけ知りあかてらて
ひんさん又垂ち法もう

初入みて又中さと國地見門
花石見外ふまぬこそと記
曝の事見者度人ノの没
ふくいくさきをる程かりる
泉さち重人元しやく銭見さて
岩吹くふ風のうしに
泉か酒へ水つれ色りをを
されこのみさきれまてぬとあ
蓋迫くあり見時ぬを水つかい

さて音あいく銭事川へかりる
さしかの事にむこのいをかに高世い
毎さ出ほんをおし童面
七橋や誰の物語呼清銭
門さしかけふ時ぬを見
席破急ふ呼清十二紙又ツ
柏子木さつうはものとを
又ツ打紙銭食い陰ぬを
数口ツうてる人とあり利

呼入れかの袖やに書付をとりて
人々に相こうて挨拶をなん
初入しと中立し暑いお茶
をもいつもくよりも入り給よ
事成はれよ中入を蹲いて水つの
組石をかいしれ面白うさも
見覚て面白くかれ国地の門
種こみをうの袖かさり事源
国地れ門枝弁をれ横ら

さいて外へいしてぬものなり

茶懸前

客人れ　席定い　腰をかて　茶具出
羽箒にて　打たくき　茶碗をとて
腰中を立　居中まいて　左ホ　て
柄杓にて　右れ小　竹柄をにて
水をき　元さく右て　取かすて
こはしをとこ　盆を中へて　皆お出て
金釈して　先れたて　茶碗をり

右ふくさ
茶椀をし
ゑめ見てに
しりけ者て
ず左ふ
ゑあけて
帛ちゝめ
扶して
分帰て

保ろり紙
左ふくさ
見通しに
右手茶入
中ほとふ
ゆきをのして
下ふをき
帛紙をて
茶入しり
茶椀の底ふ

ゑ紙し重
茶入れ底ふ
右ふしり
帛左ふ
引ふて
こり地ふい
尺さし之
ひさくれ
答蓋ノ

茶杓を入て
茶答重
水指の上
うつし杓
茶椀の紙を
大かゝ
凡釜中スミト茶ワンノ中スミト見通スこ
帛マ引ひさく
二ツ三ツ

巾ひかけ
又帛をい
打ちひ
茶巾を重
むふまり
五ツめ紙れ
ゆ右のふ
杓ゑて
ゆゝ打ちひ

蓋を五
ひきとを奈ふ
湯瓶提て
御一ていふ
後して
湯〻を盃ふを
ちやせんを
右府ふ返し
扶して

帛紗さばきに
うけして
湯をきて
先ものきて
湯を提て
中蓋をメ
茶巾を五
そもそも亟
茶巾ハ
水指上ふ

たゝみて
御あかを拭
湯をきて
ひしゃくを
元さゝをい
こゝしを志て
こゝしい又
法如てふ
上ケ亟て

又茶せんを
亟しをく
茶巾扶て
茶巾をを五
れまふへ
茶巾扶て
茶扶ゝり
炉縁の上ふ

湯如して
水さし上の
扶扶へて
茶碗い中ふ
中へ入
扶茶碗をい
水さしの
茶入を五て
扶せをく

茶巾扶て
茶巾ゝり
茶湯如し
扶ゑこう
者のてふ
下ふをき
上ふあ者亟
ふく取て
茶を能わさふ

蓋を取
ひらくと共に
湯玉滴て
衡一杯いふ
後して
蓋をもて
茶筌を
ちやせんを
右府ふ返し
扶して

帛紗にて
うけして
先まきて
湯を滴て
中蓋をメ
茶筌を取
ちやせんも同
茶巾を取
水指上ふ

たたみて
衡あかを拭
湯をきて
ひしやくふ
元さをい
こうしをたて
ちやせん又
法れてふ
上ケ置て

又茶せんを
置しをく
茶筌を取ふ
湯玉落る
茶巾を取て
れまふへ
茶巾扶て
茶杓とり
炉縁の上ふ

湯地して
水ます上の
杓をへて
茶碗い中ふ
中へ入
杓茶碗をい
水ますの
茶入れて
杓せをく

茶筌を取ふ
茶巾とり
ふ湯地し
杓をうつ
者のてふ
下ふをき
上ふあ者置
ふく取て
茶を能かさふ

まくひ入
茶筅ほどきて
茶杓をい
たゝ洗し
帛紗にい
れたまく
點るなり
茶せんを
あらあらし

茶入ふたを
茶筅にて
茶杓をとり
帛紗をい
ゝ水にて
湯筅洗て
茶碗の底ふ
ぬりあて

底ふき
茶杓にて
掬ひとり
茶筅をさ
ゝ水にて
茶筅にて
湯ぬ〻し
底をとし

其中ふ
まきて上へ
おかぬ向ひ
論きゝ
水指おし
ゝし
先まいれ
時宜にして
茶始るこ

茶筅を納
ぬきたて底ふ
ふこ論の
其中通り
茶碗をも
其時表も
挨拶し
お客ふ
宜にして
亭をふい

息をため
ず〻又
帛紗にて
炉ふ合
帛の上ふ
亭を合
又お客ふ
是にて
右ふて掬ひ

少う拔て
志のごとくに
ひもをくい
柄杓筋遠ふ
上ふをき
はし長く
返るさい酒
蓋重重し
谷れあり

たへ後し
柄杓ばい
弁慶
水さ酒合
茶
腰ふ
あるい又
湯帛の
ひさくを
帛を
折をひて
ふく拭をり

谷れあり
柄へしとれ
弁慶ふ
水さ酒合
あるい又
湯帛の
ひさくを
帛を
ふく拭をり

川切ふ重
ひさくをい
谷のあこの上へ
水さしれ
さ酒上へ
弁慶ふよせ
水一柄杓
谷ふこのけ
たのを拭へ

あくさをい
谷ふ盃重
上ケ重て
蓋拭酒ふ
茶碗なり
柄杓
谷ふこのけ
茶ふんう入い
ゆ茶て

腰ふ拭て
茶巾を
水さに酒
を杓て
水さ通の
ひしやくを
ひしやくい重ふ
右のをや
茶のちをて

御帛の

少う拭て
志のごとくて
ひもをくい
拍子筋遠ふ
上ふをき
手伝も居て
返るさい物
蓋重重し
谷れあり

左へ渡し　谷れあり
拍子桶へもとれ
弁膳重して
盤張ふ
茶ふたし
水さ用谷
膳ふて立
あるい又
拭拭中
居居ひ重
其ふて
折ひつて

川切ふ重
ひきくとい
谷のあるこの上へ
水さしれ
さ用上へ
盤ふよせ
水一拍拭
谷ふこのけ
左のふ拭へ

ひきくさをい
谷ふ盤重
上ケ重て
蓋ふ用ふ
盤をなり
拍せ盤重
谷ふさし
茶ふ入い
ふ用谷て

膳ふ拭て
茶巾ふ
水さに向
ふ拭て
水さ通の
ひしやくふ
ひしやくい重ふ
右のふや
茶のちを

息をきく
茶礼のあれい
其きに
む免合つ
あをかて
湯口の蓋を
下かを
挨拶ていい
くみ入て

下かを時
湯一ッ汲て
茶の分ば
湯如しとして
巾ひあ手
を時あ分
金尺して
ひさく盃

一同か
答拶を申
まく水筋
指かをおさ
ちはして
右かて茶筅
此仕舞こ
水一元さく
其をかて

茶筅をすき
水をすて
中かて茶巾
下かをき
帛紙おし
茶のはかた
又帛して
妙さ筋を
常れてくか

茶筅を合をも
茶巾を元て
円かいり
茶筅元入
をかを盃て
ちはの上かて
のさひて
右をかを
巾ふなり

本座かを
茶志めし
右の水添て
妙ちさ筋
茶拭巾ひて
打拂式
茶碗かを
茶入元
拭其時か

お茶入れ
法のごとく
茶入をだ
たれ方か
三ッ目程か
答か水さし
答れあり
ひさくに茶か
水指れ

平なるあり
出れなり
水指かも
重し重
茶碗を重
ひさくをい
くさくなり
ゑいこと
竹梅か重て
たかて

さもあるい
又さもれくい
三ッ目ほと
又をよりも
柄杓さし
たかを流し
たれを
たかを流して

水さしれ
ゆくを〆
平のあく
志ゑくはと
元さくに切
落ちして
さ目しれかく
ゑあけて
宮かふむ白く

ゆくさかふ
をけきりか
辞退して
落ちを吸て
一ッ目か
たれをふて
重しに目
茶碗ゑ
たるて茶入
表おき形
論しみ

たかを流して
おちや入を
重てもを
水さ目
勝をかを
茶碗ゑ
たるて茶入
あるかく
たたを表中か

おゆうさ　一尺ばかり
宮いをかま　真まるに
一度　お湯ふれて
ふい定る　時宜をあれや
一所ふこ　所をもあい
かい先を　かくして
宮　れかく　左ふ　代巾
おし　重ね　もしい又
紫宿　右　ふんさまる時

さしあて
れあるに
出湯せを
茶扨俵も
茶扨　右
代れたう
右　茶　扨
所をあれい
お茶扨さ

所をれあい
水さしれ
ふんさまる時
おしをき
盈れ詰ふ
水さしや
如れふる伝
門ふ　入
亭ふおい

て　ふ
上ふ重ね
所ふ
水指を
かりふ拭き
ふ重れ詰
れ出ひい
清子門立
宮よりも

又俵をい
水さしを
あれてに
拭れまに
布巾をを
を外ふ
水さしを
やかて又
重る

茶入又
左右ニ手を
一礼を
請礼をして
清子の
名出て挨拶を
出て成る
辞退する
炭斗ニ渇

茶杓仲ニ
引きれを
辛を道を
茶入を
下ニ重ね
茶入を
炭斗ニ入
法れて
道を
杓をこの
腰ニ入
法れ炭
辛を
炭斗ニ入
法れて

答を
炭仲ニ
先ニ
相第ニ
炭斗
後れ水
引入れを
勝手へ

ニ回ニ
重して
初度炭
炭源より
岩掛ひ
ちい
折ニ
かんかん
お通り

度を
茶を
かをき
ニ炭の
答礼かけ
炭を問ニ
面白の者
あるひ出
会ふ

要ふ見る　おいとまを　宮ないて
猪名ふ立　外面地へお　送り出る
市の出禮　出安用と　堅く辞退し
宮をして　又出花や　膳をへしも
宮通りあい　取れくふ　もてなをして
市を明りける

[illegible]茶點ふおく詠しれるの
上げよりて終手　まれをいとも

又日暮て終り[illegible]詠れ者
上げよりて終手　まれをいとも
水さし[illegible]ておけ　まへふをき
内て宮[illegible]ふ取[illegible]るよ
九月や十一月ふもたをせしも
中れかふみて水さしをけ
水さし[illegible]ふ九月ふれ
猪名れかさいとも[illegible]
床柳れ葉入と[illegible]ふ取れ

亜小見台　おいとまさ　客かいて
猪子小立　外国地へお　送り行く
市内出張　出安用こと　堅く辞退
客として　又い出張や　勝手へも
客通りあい　おきれしくふ　もてなをして
市を明り居る
盈ふて茶点ふおそ話しれとの
上弁よりて　ちきれをいとも

又日茶こて終り亜さら御れ者
上弁ようこそきれをいとれ
水さ球打ておけ　まくふをき
内て完弁小地亜しるよれ
九月や十一月みもたをせしも
中れかあみて水さいをけ
水さ球をけるい九月ちれ
猪子れかさいもかもの
床柳れ茶入とまくふ亜時

なげさしぬやうに水さしいとけ
ぬりふされとそは掛に水さし
さもふさなすさいさいさいさいり
勝をより茶入茶入を拭おて
茶入かく茶入をひくこうを
元来これい共をりかはいれ
水さしの上件れ元さく
柄杓をふいうはむけ足るおれや
あとむ者るよ共柄れひさくい

柄杓弁柄水ふけ者を柄をふきて
盈れとふのけていれなり
茶巾ぬい水ふけをき思れなこの
茶をんふ仕迄おていつるへ
法れてを家をもさせ法道れ
かいく茶湯いきふなり竜
門法をを外やいかふ茶巾元
をかく出くをいつかとをふく
ぬれ重元きをぬ拭ふ茶巾をは

法千ふしてたさまくていせ
帛免てたおれい事落るほくふ
仕さくていおれ菓の菓巾い
畑つくりて菓巾いさけ水精れ
上ふはもれる書こうるまて
茶れ免く菓物ふはかた巾ひし
てまくるくはよふおくなり
茶物をいくりおしつて菓いまと
大脂されい梅ふるやいふ

之免てい節樋ひ宮力一免を
ふひを茶へ弁梅をい重
さ用をい地茂長よりも宮めれ市
元さくるこのをおして持おく
書くくある盈をおをてまと
さて免人はくい岡月前なり
伸をいはッ綿ふくりて形笛ひ
家茶ふしてて汗ふかくなり
さ用れ下水さしれ安湯持れ

訂のもか茶て仕ほをとく
謂かけれ訂ふ仕ほをかるふい
尾先を下にあ結ふをかく
法茶ュ分中ふく三分うを茶二分
見いかしへれひとりまへとを
古茶い畑へ形茶いふへぬるのなれい
ふ仕法茶て茶をいくむへし
いかしへ今ひるさき茶をいきへた
むのれかいうをきかそ思ふ

茶仕くむふ大切ふ元ちゃ入ふ
きをい別るきいふをを
湯法ふい之口茶ゆを法むふ
をてふる法ふ弱てたるへし
湯ふをりて柄形うこかをはひくき
答ふいひをを川あけておく
貴い湯法ふ法ふ水法ちをく級
ふい湯あをく水をを法ふ
湯をくむふのをを茶ふ御れ門

さへてこそ物くむへかりけれ
さひ茶をいふりるてはやまこふ
しらくまりいかれさいれさ
彩茶をいはりはるこして悪ぬへし
古茶をい振はひかへてを悪
大切ふ悪ばかりるをきしふ
をさんりんい　け一ふを
ちやうんふい書書　れありたうき方
おしてるれをきまへふまはなり

茶振れうち春はお同はけるなよ
をしめの話を後まをいおけ
茶はのむふちやうんまいをいあきこ
ゝ一人ごまいしるよう
濃茶れ話ちやうんふあり茶のはをを
湯はを西をしてそのむるいうを
帛はいをふれてれめをは
宮れをしちふるして生こ
さいちやれ話古法をりしてをき湯を

亭主はのむいのまさるをよし
二人い茶臺はしき者は人より
茶ゐんをかりをして如中居し
隠しかまいはしとして茶臺をい
ゐ茶をなしいきかぬしをよきく
ゐい茶しを其茶入ゐて居茶して
茶入交てさ茶釜軟然帷子よ
釜をゐて居ちやまを題志ゐまふとし
先水さしをさして亭居し

客人ゐの釜は居ふていらゐちをを
茶入交てしいをいをぬるのなり
引次ふうを茶しゐりし金林ち
ゐ茶をしてふしてぬしをきく
茶入ゐて迎はいかきを手み
亭主をしりよき湯ふを亭居る
迎は時茶入いをふ仲引しり
ふく該ふ茶さく亭居へてゐを
後は水い中ゐん合せ炭は附ち

又い落葉を焼き落ふ者
大用意しき所ゝ
おかむ祝家ふ志るし社乳
後は炭の香薫いを
敷て炬燵ゝ
ゝ人の茶碗炮してをむるい
ちやの中ちかゝ
茶ゆくむふ茶ゝん